

白山ふるさと文学賞

第十回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 最優秀賞

足搔き、贖い

北辰中学校三年

湯浅 ゆあさ

なな

正直、故郷に帰って来るのには、かなり勇気がいりました。故郷に住んでいた最後の半年間は、それこそ、地獄にいると信じてやみませんでしたし、全てを忘れて暮らせたならどんなに良いか、とも思っていました。

別に、楽しい記憶が全くなかったわけではなく、むしろそういった思い出の方が多いくらいなのですが、あの日、地獄で暮らすことが決まったあの日が、余りにも大きく、私の人生を変えてしまったのです。

帰省したのは、実に十年ぶりでした。つまり、大学へ進学するために上京してから、一度も、母に自分の顔を見せていなかったことになりました。こんな親不孝の理由の一つも、ただ私が、この街に帰ってきたりなかったからなのですが、さすがに心配をかけすぎているかと思ひ、盆休みを利用して、実家に戻ってきたというわけです。特に何をやるわけでもなく、空調を効かせた涼しい部屋で、昼食に、貰い物のそうめんを食べ、余暇を満喫していた時のことでした。来客があったので玄関に出ると、ある懸念していた問題が起こりました。来客、というのは、言ってしまうえば二人の旧友だったのですが、実は、帰省する前からずっと、ただだけ会いたくない、と思っていた人達でした。

嫌悪感が顔に出ているか心配だったのですが、二人は、私の心境なんぞ知らないようで、満面の笑みを浮かべて、代わる代わる、再開を喜ぶ言葉を並べました。背の小さい方、健ちゃん（本名は健一といいます）が一人しゃべり続けるのを、隣に立つもう一人の旧友、倉田が止めに入る姿には、ありったけの見覚えがあつて、二人が昔と何も変わっていないことに、懐かしさと安堵と、同時に、少しばかりの疎外感を、覚えませんでした。

「おばさんからお前のこと聞いてよ。帰ってきてんなら連絡くらい寄越しなつての」

おばさん、とは私の母のことでしょうが、会いたくなかった、などと言えるわけもなく、健ちゃんの言葉に、私はただ苦笑いを漏らすだけでした。

「高校以来だ？お互いとつたもんよ。卒業してから全員で集まる機会もなかったしよ」

言ってから健ちゃんは、何かに気づいたように、あ、と口籠まりました。倉田も、健ちゃんの言わんとしたことが分かったようで、わずかに眉をひくつかせ、気まずそうに視線を彷徨わせました。ああ、だから、会いたくなかつたのです。

「全員」はもう、ないでしょ……」
私が俯きがちに呟いた言葉は、想像した以上に、冷たく、鋭いものでした。

あまり思い出したくないのですが……事の発端は、今からちょうど十年前、高校三年の夏休みのことです。当時、私は、健ちゃんと倉田、そしてもう二人を合わせた四人の、仲の良い友人がおりました。私を含めたこの五人は皆、同級の者で、頻繁に遊び仲間として連んでおりました。遊びの誘いはもっぱらマサ（五人のまとめ役でした）からで、あの日も、マサからの招集があつたのでした。

「なんかパーツと楽しいことしたくね？」

髪を染めて、ピアスを着けて、だらしなくジャージを着崩したマサは、遠目からでもわかる不良少年でした。ですが、私たち全員が不良、というわけではなく、特におトキ（五人のうちの一人です）なんかは、執拗に校則を厳守していました。今思えば、マサ、健ちゃん、倉田、おトキ、そして私、この五人に何の共通点があつたのか、少しも見当がつかません。でも、何故だかこの五人でいると、居心地が良くて、楽しくて、飽きなかつたことは覚えています。

「で、何すんのよ」

健ちゃんが尋ねると、マサは、鼻に皺を寄せて笑いました（悪戯を思いついた時に、マサがよくやる癖でした）。そして、手を口元に近づけて、クイとグラスを傾ける仕草をしました。

「飲みたくね？」

「っは！とうとう手出すのかよ」

「良くないと思う」

心なしか、わくわくしているように見える健ちゃんに対し、倉田は乗り気ではなさそうでした。

「いいじゃん？最後だし」

な？とマサに同意を求められ、返答に困って一步離れて立っているおトキを見やると、おトキは肩をすくめました。

「皆がしたいなら止めないよ。まあ、最後くらい、いいんじゃないかな？僕は飲まないけど」

「ほーらね、おトキさんもおっしゃってる」

マサと健ちゃんは、倉田を説得にかかり、なんとか了承させたようでした。皆（自分含めですが）どこことなく、賢いおトキの言うことを信じる節がありました。それは、良い方向に進むことが大半ですが、時として、悪い方向に転ぶこともあるのです。

作戦はまず、飲み物の調達からでした。が、図体の大きい倉田が、大学に通う兄の身分証を持ち出し、大学名の入ったTシャツを着れば、どこからどう見ても未成年には見えませんでしたし、実際、何の問題もなく店から出てきたので、こちらが呆気にとられたくらいでした。会場は私の家でした。単純に、母が夜勤でおらず、都合が良かったからです。こうして、私たちは、いとも簡単に、宴会の準備を整えました。

余談ですが、私の家は「ポニヨの家」と呼ばれていました。というのも、家の建っている場所が、海に面した高い崖の近くで、その様子が、さながらジブリ作品のようであったからです。もともと、私の生まれ育ったこの街は、海と共に栄えてきて、今なお漁業が盛んですが、所々に、岩肌の見える切り立った崖があるのです。中でも、一番高くて、一番景色が綺麗なのが、実家の目と鼻の先にある場所でした。

そんな我が家で開かれた秘密の会合は、大いに盛り上がりました。私

や倉田は、少し口にしただけで、おトキに至っては全く飲んでいませんでしたけど、それでも、十分でした。とにかく、五人でいられることが、何よりの幸福だったのです。高校三年という時期で、私たちが一緒にいられる時間はそう長くありません。マサやおトキが言ったように、これが、思い出を作る最後の機会なのかもしれません。誰も口にしないけれど、ただ、ただ今が幸福ならば、それで良いのだと、おそらく、これが私たちに共通する、唯一の考えでした。

どれくらい時間が経ったでしょうか。マサが、外の空気を吸いたい、と言い出しました。私たちもそれについて外へ出ました。夜と言えど夏です。未だに、間延びした昼の熱気が残っていて、かろうじて、海の方から吹いてくる風に、涼しさを感じる程度でした。携帯の明かりを頼りに、五人で、崖の、海側へ突き出ている、平らな場所へ向かって歩きました。花火でも持ってくれば良かった、と誰かがぼやき、確かに、と誰かが相槌を打ちました。そんな他愛もない会話が、五人の時間を引き留めるように、ぼつりぼつりと続きました。崖の縁のすぐ近くまで来て、私たちは足を止めました。静かでした。鼻から吸い込んだ空気は言い表し難い夜の匂いに包まれていて、吐き出してしまうのを躊躇うほど、心地よい刺激を含んでいました。遥か眼下で打ち鳴らされる波音に、虫の音が重なり、火照った体を潮風が撫でていきました。暗闇の中、視覚を奪われて研ぎ澄まされた五感は、より一層美しい世界を見せてくれます。でももしかしたら、一番美しいのは、視覚に頼れない不安と、焦燥に駆られながら、迷い足掻く時間なのかもしれません。特に、それが、二度と戻って来ないものについて、だとしたら。今、不意に、そんな考えが頭をよぎりました。だとしたら……だとしたら、どんなに素敵なんでしょうか。

マサが徐に進み出ました。ゆつくりと、崖が途切れる数歩手前まで歩いて行き、両手を広げ、大きく伸びをして言いました。

「付き合ってくれてありがとな。割と、楽しかった」

割となのかよ、健ちゃんが返し、私と倉田は吹き出しました。マサが肩を震わせたのが、後ろからでもわかりました。感謝を伝えるのに、表情を見られるのが恥ずかしくなったんだな、とそのとき私は思いました。マサが、振り向きました。いえ、正確には、振り向きかけました。マサの体が後ろに傾いたせいで、ちゃんと、こちらに顔を向けることはできなかつたんです。心臓が跳ねました。嫌な予感がしました。マサの足は、すでに、地面から離れていました。宙に飛び出した体が、瞬く間に重力に飲まれました。もはや、姿は見えなくなつて……。

「マサ！」

健ちゃんが、呼び止めるように手を伸ばしました。倉田が、そうして崖に駆け寄る健ちゃんを、必死に掴んで止めていました。鼓動が速まりました。全身から汗が吹き出しました。息がうまく吸えなくて、声にならない悲鳴が喉を突きました。ほんの数秒でした。聞こえてきたのは、何かの鈍い音と、水飛沫の音でした。頭が真っ白になるつてのはこういうことなんだろうかと、他人事のように考える自分がいました。

この後の記憶ははっきりしません。崖の下へ降りるには、来た道に戻つて、急な岩道を降りるしかないはずですが、どうして、自分の足元も見えない中、転びもせず、波打ち際まで辿り着けたか、思い返せば、全くわからないのです。健ちゃんが走り出して、倉田がそれを追つて、やつと、なんとか、私も強ばる足を動かして、そうして、いつの間にか、岩だらけの岸に立っていました。私たちのいた、ちょうど下辺りに近づくにつれ、ほのかに、鉄の臭いが混じり始めて、込み上げる吐き気にとどう座り込みました。先を行く倉田と健ちゃんの、マサへ呼び掛ける声も、次第に力を失つていきました。

怯えていました。自分たちは、何か、とんでもないことをしでかしたのです。今にも暴れ狂いたい気持ちでした。これが現実でないことを祈るばかりでした。そうです、これはきつと夢なんです、ええ、たちの悪い悪夢なんですよ、目が覚めれば、ほら、マサが笑っています、悪戯を

終えた時みたいに、鼻の頭に皺を寄せて、私たちに目を向けて笑つてるんです、そうです、夢だったんです。あんなのが現実だなんて、現実だなんて嘘なんですよ、ええ、きつとそうだ、じゃなきゃ、俺は……。

「落ち着け」

おトキの声がして、私は我に返りました。振り向きました。ちゃんとおトキがいました。肩に置かれた手の重みに、ここが現実だと知らされてるようでした。

「パニックは二次被害を生む。でしょ？」

叫んだわけでも、感情的だったわけでもなく至つて淡々と、冷静なおトキの声に、無性に安心感を抱きました。手を引つ張られて、立ち上がれるほどには、足にも力が入るようになっていました。健ちゃんと倉田も戻つてきました。集まったのは四人でした。マサは、いませんでした。

「どうすんだよ」

健ちゃんの声は、震えていました。誰かが鼻をすすつて、小さく吐息を漏らしました。喉の奥の方に鋭い痛みが刺しました。

「だから、どうすんだって！」

「わかつてるでしょう？」

健ちゃんの言葉を、おトキが遮りました。冷たく突き放すようで、それでいて、悲しみの入り混じった、苦しそうな声でした。それから、下に向けていた顔を上げて、私たち一人一人を順に眺めました。

「わかつてるんでしょう？まずしなきゃいけないのは『通報』だ。パニックになつたとは言え、何よりも先に思い浮かぶことのはずだ。じゃあなぜ、誰も通報しようとししないの？」

完全に、核心を突かれました。みんな、顔を伏せました。もしかしたら気付いているのは自分だけで、だったら誰かが言い出すまで待つていよう、だなんてことを、みんな、思っていたんです。いや、同じことを思っているということにも気付いていました。そんなこと、とうにわかつていました。でも、言わなかつたんです。

「なぜって、僕らがすでに法を犯しているから」

胸が、長い針を押し込まれたように痛みました。すぐにでも、この場所から立ち去りたい気分でした。……立ち去りたい？自分は何を考えた？マサを見捨てるつもりか？違う、そうじゃない、そんなわけない。ただ、言えば良かったんだ、思いついたことをその場で。最初からそうしておけば……そもそも最初っていつなんだ？崖にいる時？それとも、マサが提案した時？もっと、もっと昔だったらどうしよう、例えば、初めて俺らが出会った時、もしそうなら、俺たちが一緒にいた時間は、全部、間違っていたのか……？わからない。もう何もわからない。全てが疑心暗鬼でした。もちろん自分自身も。刻々と、時間だけが流れました。

「俺は」

沈黙の中、倉田が口を切りました。

「俺はやっぱ、通報した方がいいと思う」

倉田の長所は、寡黙ながらも、自分の意見を口に出すことでした。誰よりも仲間思いで気が利いて、でも押しに弱いところがある、そんなやつでした。

「今から？」

おトキは俯いて、額に手のひらを当てました。さつきとは打って変わった、小さく、消え入りそうな声でした。倉田が言葉に詰まりました。

「補導されて、家と学校に連絡が入って、停学か、退学か……」

「そうじゃねえよ！」

健ちゃんが目元を拭きました。絶え絶えに息を吸い込んで、キツとおトキを見上げました。

「マサの話してんだ。俺らの話じゃねえんだよ」

おトキが目を見開いたのがわかりました。それから、顔を横に背けました。

「ごめん、わかってる。わかってるんだ」

おトキの動きに合わせて、きらりと輝く雫が一滴、頬を伝って地面に吸

い込まれました。

「でもね、人って、案外、案外簡単にね……」
おトキはその先を言いませんでした。

これが事の顛末です。結局、警察に連絡がいったのはずつと後で、マサは行方不明の扱いになり、私たちが関わっていたことが突き止められることもありませんでした。マサ失踪の件で、周りからいろいろと心配されましたが、私たちの悩みの種というのは、実のところ、周りが思っていることと全く違っていたのでした。いまだに夢に出てくるのです。来る日来る日、のたうち回りました。地獄。まさに地獄でした。世界は業火の炎に焼かれていました。高校を卒業し、とにかく、早くこの場所から去りたくて、上京しました。もしこの記憶がなくなるのなら、喜んで、今まで生きてきた思い出全部を投げ出す覚悟さえありました。それなのに今日、またこうして、目の前には旧友がいるのです。やはり、帰ってこなければ良かった。再び地獄に落ちた気分でした。

「全員はない、五人が集まることはもうねえよ。でも、だからって、疎遠のまま終わるなんて、俺はそんなの嫌だ」

健ちゃんの瞳が、真っ直ぐ私を射抜きました。いつになく真剣で、どうしてそんなに輝かしい目ができるのか、と、問いたくなるほどでした。

「倉田から四人でもう一度集まりたいって言われてよ。お前はちよとど帰ってきてみたいだし、おトキも今日中にこっち着くみたいだから、そしたらよ、久しぶりに……」

「ごめん」

耐えきれず押し出した言葉は、健ちゃんのと重なって止まりました。え、と健ちゃんが、黒目と上瞼の間に白い隙間を作りました。

「今日は、ちよと……」

もう誰にも会いたくありませんでした。一刻も早く、この人たちと別れたいと思いました。そんな気持ちを感じ取ったか、健ちゃんはそれ以上

追及せず、軽く頷いて、気が向いたら来いよ、とだけ付け加えて、来た坂道を下って行きました。

「俺らにできることって限られている。その一つになればって思ったんだけど」

小さくなっていく健ちゃんの後ろ姿を眺めながら、倉田がぼそりと呟きました。それからこちらに向き直りました。

「時間が経っても、もう会えなくても、友人には変わりないから、さ」倉田は照れ臭そうに笑ってから、短く別れを告げ、健ちゃんを追いかけに行きました。しばらくそれを見つめて、無駄に静かに、音をたてないように扉を閉めました。座り込んだ体の中に、せり上がってくるものを感じました。憂い、嘆き、嫉妬、羨望、罪悪、自己嫌悪……いろんなものが入り混じった、黒い塊でした。全容が把握できないもどかしさに、無性に苛立ちました。腕に痛みを感じて、無意識のうちに爪を食い込ませていたことに気が付きました。外からの刺激に傷ついたのかそれとも内側の傷が見えるようになっただけなのか、歪んだ景色の中で考えました。

黄昏時でした。外へ出ると、蒸し暑い空気が体にまとわりついてきます。太陽が遮られて、あたりは青色のフィルターをかけた影が落ちていました。ふらりと、あの崖の先端へ向かって歩いて行きました。前に来た時より、明るく、波が白菊の花弁のように散るのがはつきりと見えました。(マサ、怖かっただろうな。)縁から下を覗き込むと、想像以上に地面が小さく、足がすくみました。案外、一瞬で終わるものなんでしょうか。毒々しい紫色の空の、鮮やかな紅色に染まった雲が、横に線を刻んでいました。それが何本も連なって、爪で引っ搔いたような跡を作っていました。

なんだか、マサがいなくなった直後の頃を思い出しました。自責の念に押し潰されて、一人閉じこもっていた時間。やがて逃げることを覚え、目を背け続けて十年が経ちました。でも、あちらから目を合わせられて

しまつては、逃げることもできません。倉田の言葉がずっと頭の中に響いていました。「友人には変わりないから」私はもう、あなた達を「共犯者」だと思っていなかったというのに……？今やあなた達のことを、私を突き落としにかかる討つ手にしか見えなくなりました。私だけがきつと、一人、取り残されているのです。

背後から、足音が聞こえてきました。呆けている姿を見られたか、とびっくりとして、後ろを振り返りました。

「危ないよ。わかっているとと思うけど」
片手を上げて歩いてきたのは、おトキでした。

おトキが私の数歩手前で立ち止まりました。容姿こそ変わっていますが、顔に浮かべる微笑みには、あの時の面影があります。私はまた、引きつる口角を無理やり持ち上げ、手を振りかえました。おトキが、私の後ろに広がる空を見上げました。

「綺麗だね」

「嘘、痛々しいよ」

「だから綺麗なんじゃない」

おトキが目を細めました。その恍惚とした横顔をちらりと見てから、私はおトキの視線を追って天に顔を向けました。

「実は、あの時のこと何も覚えてないんだ」

おトキが話し始めました。

「人に落ち着けて言いながら、本当は僕が一番焦ってて。相当、酷いこと言ってたらしいね」

健ちゃんに教えてもらった、とおトキは苦笑しました。

「みんな同じだ。正気でいられた奴なんて一人もない」

私が返すと、おトキは自嘲気味に息を吐き出しました。みんな悪くて、みんな悪くない。自分を正当化するために、ひたすら心の中で言い続けてきたことでした。でも、あの人たちと私が、同じ重さだなんてことはあるんでしょうか。いいえ、私の方が悪人に決まっています。私には、

あんな純粋な瞳……。

「なんで、刑事は犯人を崖に追い詰めるんだろう」

唐突に、おトキが言いました。その意図が読み取れず、私は思わず、おトキの方へ顔を向けました。

「飛び降りられでもしたら大変なのに。まあ、だから犯人は崖へ逃げるんだらうけど」

おトキの目はじっと、何も無い虚空を見つめていました。

「つまり何が言いたかったね。自白の場と償いの場を間違えちゃいけないってこと。ここは償いの場じゃない。でしょ？」

自白には打って付けかもしれないけど、と笑いながら、こちらを覗き込んだおトキから、私は目を離せませんでした。ゾツとしました。心の中を見透かされているようで、背筋に寒気が走りました。逃げるな。そう言われている気がしてなりませんでした。

「それに、最初から刑事なんていないんだ。だって通報してないんだもの。いるのは、救いの手を差し伸べる仲間だけ。いいことも悪いことも、全部一緒にしてきた仲間だけだ」

目が覚める感覚がしました。どうやら私は、一番大事な部分を忘れていたようです。どうしてあれが許されると思っていたんでしょうか。逃げでしかないというのに。私は過去の過ちに向き合うどころか、迫り来る波に怯えて、自ら沈んでいくことを選びかけていたのです。何という身勝手。それこそが過ちではないですか。挙句、友人の手を拒絶し、何か恐ろしい、私に危害をもたらすものだと思っていたのです。これほどの愚行が、他にどこにあるというのでしょうか。ああ、すべきことがある。今まで見ぬふりをしてきたことを、通り過ぎてきたことを。

「二人はどこにいる？」

「健ちゃん家だと思っただけ」

くるりと背を向けて歩き出すと、おトキに呼び止められました。

「最後に聞かせて」

逆光で、輪郭だけがはっきり見えました。

「何への償い？法に背いたこと？非人道的な行いをしたこと？それとも……」

「マサへの」

私は迷いなく答えました。おトキの表情は見えませんでした。風が吹いて、過ぎ去っていくだけの時間はゆうにあっただと思います。少しばかり、音のない時間が続きました。

「やっぱり、綺麗だ」

